クェゼリン方面
戦歿者遺族会
中央区日本橋蛎殻町2—11
泉商事株式会社内
電話 東京（661）6511
振替口座東京93487番
編集兼発行人　浮田信家

和彦の想い出

石橋梅子

「お母さん、僕いよいよ任地が決まりました。出発は一月の三十一日です。」という報告を聞いたのは、昭和十八年の一月のはじめでした。「僕は任地の希望を書く際に、両親健在、兄一人あり、後顧の憂なし、よって外地を希望すると書いておいたのです。」これを聞いた私は、誠に潔よい若者の覚悟と、我子乍ら敬意を覚えました。然し両親の気持をも考慮してもらいたかったという、心の痛さをしみじみ感じました。かくして昭和十八年の一月三十一日十名程の同僚と共に品川駅を発ちました。家族、親友、その他大勢横浜駅迄見送りにまいりました。彼は、にこやかに車中から挨拶をして任地に向ったのでありますが、これが最後の別れとなってしまいました。任地は、マーシャル群島のクェゼリンで、そこに到達する迄一ヶ月半位もかかった様子でした。

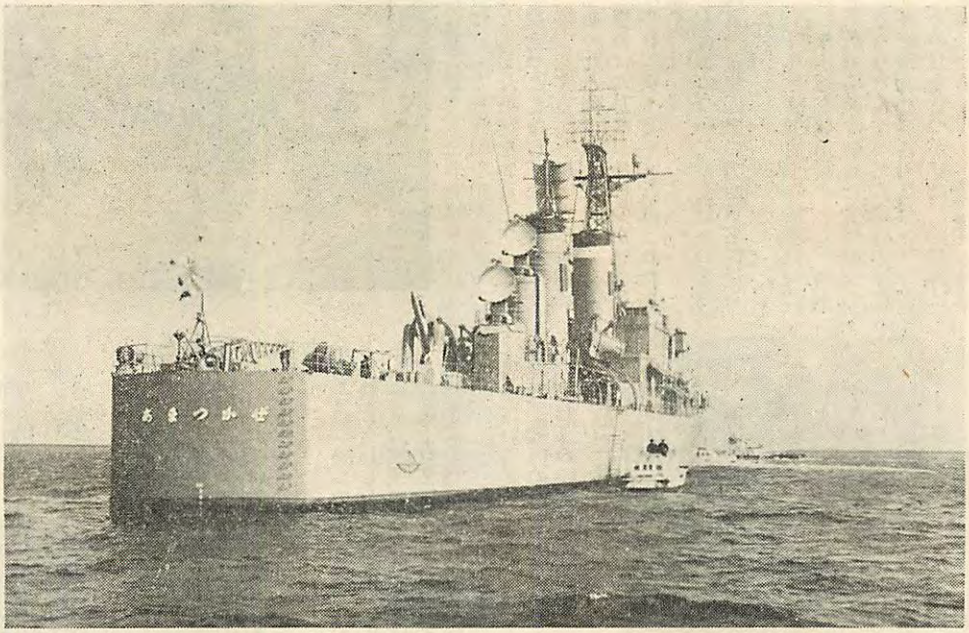
任地から度々手紙をくれました。その手紙は、世の何よりも貴重なものとして湛山も私も仏壇に供え保存しておきました。然しそれは、昭和二十年三月九日から十日の朝にかけての東京の大空襲の際、家屋と共に一片も残さず灰となってしまいました。

彼の手紙には、「暑いクェゼリン島で、病魔に侵されないように、身体を鍛え訓練に励み、南方ぼけにならぬよう勉強も試みておりますから御安心下さい」と書いてよこしたこともありました。

又、「クェゼリン島は一面の珊瑚礁で、面積は凡そ内地の鎌倉位とのことです。ここに、オクラと云う植物がたくさん生えておりまして、その実を取って茹でて摺りますと、内地のトロロのようなどろどろし

〔八頁へつづく〕

霊砂を護送して横須賀に帰港した護衛艦あまつかぜ



（神奈川新聞社提供）

目次

和彦の想い出……石橋梅子(1)
霊砂帰還……浮田常任幹事(2)
あまつかぜ艦長挨拶……(3)
記念艦三笠艦長挨拶……(4)
ウォッゼ島の戦斗……千葉秀夫(4)
クェゼリン環礁警備日誌(1)……有馬成甫(6)
昭和四十一年二月六日行事予定(7)
会則改正案……(7)
遺作と会員だより……(8)
ウィリアムス氏に想う……土屋太郎(9)
ウォッゼ島戦歿者慰霊祭について……荒　尚久(9)
本会当面の企画……(10)
戦歿英霊の郵便貯金調査事務について……(10)
遺族会名簿の刊行について……(10)
老人ホームに待つお母さんの懐へ……井上富美代(11)
ウォッゼ島戦歿者遺族の本会加入歓迎について……(12)
サイパン信託統治局よりの書簡(12)
ウィリアムス氏書簡……(13)
遺作「随分大きな島」(2)……(14)
会計中間報告……佐藤常任幹事(14)
寄附者芳名……(15)
事務局だより……(16)
本会役員及び篤志会員……(16)

霊砂帰還

常任幹事　浮田信家

昭和二十八年一月三十一日東京港を出港した運輸省航海訓練所所属の練習船日本丸は、戦歿者の遺骨の送還と慰霊祭を行うための政府派遣団を乗せて南方八島に向った。この派遣団は、マーシャル諸島とギルバート諸島については米国側の了解を得られなかったためここに玉砕、散華した英霊に対しては海上慰霊祭を行ったに過ぎなかった。厚生省の記録によると二月十三日（金）午前十時クエゼリン島の北西約七〇〇浬においてマーシャル諸島、ギルバート諸島方面における戦歿者に対する海上慰霊祭を行ったとある。七〇〇浬とは東京から奄美大島までの距離で、切角の行事も英霊に通じたかどうか。かくて今回の霊砂帰還は本会にとって、深刻な意義があったのである。

霊砂受領の準備のできた事については環礁二号及び本号によって明らかなように早くからロサンゼルスまでは届いていた。本会にとって大切な砂であっても、縁のない人々には単なる土壌にしかすぎず規則だけで考えると通関手続等で面倒になる。

一方本会としては単なる荷物として運送屋から届けられることは好ましくない。霊砂として、礼をつくしてお迎えできることを希って今日に至った経緯がある。

幸い本年六月に至り海上自衛隊の護衛艦が、一つは米国において訓練の後十月上旬に帰国又他にブラジルまで航海した練習艦隊が十一月上旬に帰国の予定であることを仄聞した。それぞれ重要な任務を帯びての行動なので、この望みが聞き届けられるかどうか案じ乍ら防衛庁に願い出た。

海上幕僚監部総務部総務課の班長岩崎寛一佐、課長の本村哲郎一佐が、御多忙の中を古賀副会長はじめ随行した我々役員を引見し事情を詳細に聴取された。この話は総務部長の古館早麿海将補から幕僚長の西村友晴海将に御説明あったと承るが二、三日後に御快諾を得た。「太平洋戦争中不幸護国の鬼と化した英霊をお迎えすることに役立つことなら、なし得る限りの協力をするように」との御指示であったと伺った。

横須賀駅内案内所

（佐竹エス様撮）

霊砂は八月四日**あまつかぜ**に届けられ以来士官室に安置されたと聞く。

本行事についての会員への案内は東京及び近県の方四百名に送られた。

十月九日は午前十時横須賀駅に近い横須賀総監部集合とし、横須賀駅構内に設けられた受付場所の設置も受付もすべて自衛隊の手によって進めて下さった。

その日**あまつかぜ**は早朝港外に投錨したが検疫とか税関、入港諸儀礼で混雑のため我々は交通艇で護衛艦**うらなみ**に案内された。司令、艦長はじめ乗員の御親切な艦内案内に一同感激した。翌日のニュースで**うらなみ**がカロリン諸島の遭難救援のためその晩緊急出港して現場に向われときいて感また深いものがあった。

うらなみ艦上にて

（佐竹エス様撮）

うらなみの見学を終り、再び交通艇に移り田浦の第二術科学校に運ばれた。ここでは隊食（自衛隊員の食事）の御馳走にあづかった。参加した百七十人余の会員は昼食の間英霊のお話など懇談を交わした。一時になごやかな昼食の雰囲気に別れをつげこんどは海上自衛隊のバスにのせていただき横須賀の記念艦三笠に向った。

霊砂三笠着

（神奈川新聞社提供）

思い思いに艦内見学のあと一時半に三笠艦内の講堂に集合した。音羽参謀の姪御さん朝香美乃子様も出席された。会員の外にウオッゼ島戦歿者の遺族二十五名及びウオッゼ島から帰還された二、三の方の顔も見えた。

講堂では林元第六根拠地隊参謀のマーシャル諸島戦斗経過の概要の講演、福地三笠艦長の挨拶（四頁参照）のあと、海上自衛隊の御好意による三十数名という大編成の音楽隊による演奏を聞かせてい

朝香美乃子様献花

（神奈川新聞社提供）

霊砂引渡式了＝古賀副会長挨拶

（国松ふみ江様撮）

護衛艦あまつかぜ艦長
菊池政秋殿の御挨拶

私共護衛艦**あまつかぜ**乗員は、この度誘導弾訓練のため渡米し本日帰国いたしましました。渡米中カルフォルニア州ポートワイニミ港に入港した際、この霊砂を遺族の方に渡して貰いたいとの依頼を受け、これを快諾して八月中旬引渡しを受け、爾来士官室に安置して参りました。

この霊砂はクェゼリン方面戦歿者遺族会の浮田信家氏の依頼によりカルフォルニア州オックスナード市東ローレル、ストリートに在住のKIETH. S. WILLIAMS 氏が収集されたものであり、同氏が本艦に託送を依頼されたものであります。

ウイリアムス氏は海上自衛隊第一術科学校に勤務しております土屋一佐と親交のある方で、遺族の方から土屋一佐を通じ霊砂の収集を依頼されたところ快諾されて、友人の SVANBERG 氏に頼んでクェゼリン島の日本人墓地から持ち帰ったものであります。綺麗に清掃された日本人墓地を背景にスヴァンバーグ氏がこの霊砂と共に写った写真も拝見いたしました。この霊砂を遺族の皆様にお届けするに当りましては、その方法に随分苦慮された様でありますが、今回**あまつかぜ**がお役に立ったことを幸いに思います。ここにウイリアムス氏スヴァンバーグ氏に代り御引渡しいたします。クェゼリン島ルォット島ウオッゼ島の遺族の皆様方に本日ここでお渡し出来ることは誠に感慨深いものがあります。戦歿者の皆様も二十数年振りに肉親の方々にお会いされ、きっとお喜びのことと察します。本日からは祖国日本でどうぞ安らかにお休みさい。

あまつかぜ艦長の挨拶　（国松ふみ江様撮）

ただいた。数々の想い出多い演奏をきき記念艦三笠の艦内であるという雰囲気、まもなく肉親の霊をお迎えするという気持これらが錯綜して霊砂の到着が待たれた。

予定の三時三十五分、警務の乗ったジープに先導され海上自衛隊の乗用車により、霊砂が静かに三笠の舷側に到着した。古賀副会長はじめ本会役員等艦上でお迎えする中を舷門を通り、上甲板左舷を前方に進み式場まで運ばれた。

引渡式は海幕総務課の久保田三等海佐の開会の辞にはじまり、まづ護送して下さった**あまつかぜ**艦長菊池政秋一等海佐の、米国で受領から引渡式に至る経過の御挨拶（三頁参照）があった。御心労のほどが察せられて感激を深めた。

厚生省にて本会えの引渡　（佐竹エス様撮）

つづいて海上幕僚長代理岡田憲政海将（海幕技術部長）、横須賀地方総監、護衛艦隊幕僚長石森重郎一等海佐、**あまつかぜ**艦長等海上自衛隊の幹部、厚生省代表、古賀本会副会長、朝香美乃子様、各島遺族代表者の献花があり終って**あまつかぜ**艦長から厚生省援護局村岡達志業務第二課長に霊砂が引渡された。献花、霊砂引渡を通じ奏された音楽隊の「国の鎮め」の曲は感銘深く拝聴された。声なき帰還をした父に、夫に、息子に、兄にそれぞれ「長い間淋しかったでしょう。よく帰って来てくれましたネ」との気持を胸に抱いてかあちこちにすすり泣く声が聞えた。

一日も早く現地に碑を建て、英霊をお慰めしなければという覚悟を更に固めた。

霊砂は当日村岡課長以下厚生省の職員によって厚生省内霊安室に運ばれ安置された。

十五日林会長はじめ石橋顧問夫人、古賀副会長及びウオッゼ島戦歿者遺族代表として村上義一様外会員多数参列の上、厚生省援護局長室において実本援護局長から林会長に引渡しをうけた。なお霊砂はその保管を厚生省にお願いし霊安室にお預りいただいてある。

十八日三つの島から三、四名づつの有志の御参集を願い、霊砂を包装し御希望申出の百四十名の方々に即日郵送お届けした。

この一連の行事はNHKはじめ各民放のテレビ、ラジオ及び各新聞は殆んど全国的に報導した。週刊誌ではサンデー毎日が十一月十四日号に掲載して下さった。

霊砂御希望の方は同封のハガキに御記入御申込み下さい。霊砂はなるべく多くの方にお頒けするためまだ残してあります。県の世話課を通じて受領されたい方はその旨お申添へ下さい。そのとおりいたします。ただこの場合葬祭料等ありませんことを御承知下さい。本会から直送する場合御希望により墓地写真を焼増して同封お送りします。本誌12頁と同じものですが多少はっきり、きれいに御覧になれます。キャビネ版一枚五〇円、サービス版二十円（何れも送料共）

霊砂発送作業　（佐藤幹事撮）

記念艦三笠艦長
福地誠夫殿の御挨拶

福地艦長御挨拶（佐竹エス撮）

私は記念艦三笠の艦長でございます。本日はクェゼリン玉砕の御遺族の皆様の御来艦を頂きまして心から御歓迎申し上げます。

クェゼリン島・ルオット島・ウォッゼ島警備の諸勇士の血と涙のこもる霊砂が本日あまつかぜによって皆様のところに運ばれ、その授受の式を、旧海軍のシムボルであるこの三笠で行われますことは誠に意義深く光栄至極のことと存じて居ります。

私事を申し上げるのは失礼でございますが、秋山根拠地隊司令官は海軍兵学校時代教えを受けた恩師であり、その後海軍砲術学校で秋山少将は先任副官、私は後任副官として机を並べた先輩でもあります。又堀家航空隊司令（第九五二航空隊）は私の最も敬愛するクラスメートでありました。又玉砕の当時私は海軍省人事局員で少佐・大尉を受持って居りましたので候爵音羽参謀の人事を担当しておりました。これは今日始めて公の席でお話し致すのでありますが、戦勢次第に険悪となる事を予想された時機に、音羽参謀を他の配置に転勤して頂く案が検討されたことがありました。この事を仄聞された御父君の朝香宮殿下が人事局長に対して「この時機に音羽を第一線から下げるとは以ての外である。そのような心遣いは一切相ならぬ」ときびしく仰せられたと承っております。誠に有難い感激に充ちた御言葉と当時誠に深い感銘を覚えた次第であります。

私は昨年の靖国神社における本会の二十年祭行事にも参列させて頂き久しぶりに朝香宮殿下の御姿を拝し、当時の事を偲んだのでありました。私はここにクェゼリン方面戦歿者遺族会が将来益々発展され親睦を重ねられ、互いに励まし合い協力し合われまして、故人が万才を三唱して遙かなる故国日本の栄光を念じつつ玉砕された御遺志を完うされますよう切に切に御祈り申し上げます。

どうか本日は今から丁度六十年前東郷司令長官指揮の下にZ旗をかかげて祖国の危機を救い日本今日の隆昌の基を拓いた連合艦隊の旗艦三笠をよく御覧いただきまして、今日の記念すべき日を一層忘れ難いものにして頂きたいと思います。最後に皆々様の御健勝御繁栄を祈りまして御挨拶といたします。

ウォッゼ島の戦闘

千葉秀夫

私は第八〇二海軍航空隊に属していた。同隊がウォッゼ島に進出したのは昭和十八年十一月二日であって、その年マキン、タラワ両島が玉砕した後、ヤルートから転進したのである。

ウォッゼ島はマーシャル諸島でも比較的クェゼリンに近く、同島から東方約百五十浬に在る。海抜は一・五米、最大幅が二千米長さは五千米というサンゴ礁の小島であって全島椰子林であった。昨日までヤルート島で毎日大型機の爆撃を受け、施設なども相当破壊された所から転進したのだが当座は空襲もうけずのびのびした気持もあった。しかしマーシャル諸島方面その頃の戦況は日毎に緊迫していたのでウォッゼ守備部隊は、陣地構築、燃料、糧食の地下格納等戦備、戦力の増強に懸命であった。

二週間もたたぬ十一月十四日に平穏無事であったウォッゼ島も大型機十機の初爆撃の洗礼を受けた。その日は殆んど被害はなかった。一日おいて十六日朝六時と午後二時四十五分再び大型機十機来襲により戦死七、倉庫六棟が大中破された（記録による）。その後も引続き七、八回の大型機或は小型機による空襲を受けたが戦死はなかったと記憶している。

十二月二十五日には大型機十数機が来襲した。その日は我々の居住地域に爆弾が投下されたので戦死者も七、八名あり兵舎も破壊された。そのときの戦死者の遺体はその夜茶毘に附され十二月二十八日の内地行航空便で送還された。それから隔日位に大型機七乃至十機の偵察爆撃はあったが大きな被害はなかった。しかしその頃からミレに小型機来襲、クェゼリンにも大型機来襲、ヤルートにもと頻りに敵の爆撃の報告をうけるようになり愈々事態の容易ならぬ予感をもって昭和十九年の正月を迎えた。

不安な一日一日を送り、一月三十日にいたったが、その日は早朝から小型機の爆撃があり、敵空母の来襲が予測された。そうこうするうち大型機の爆撃、小型機の反覆爆撃が続き島の建物は殆んど壊滅されコンクリート造りの建物だけが残存するという情況になった。午後になると今度は外海の方から巡洋艦、駆逐艦の艦砲射撃が始まり更に夕刻に及び輸送船らしい船影と黒煙が遙かに見え出した。今夜は上陸を敢行するのだナと思っていた。この日の攻撃は今迄にない小型機による陣地、砲台の反覆爆撃で徹底的のものであった。かなり多くの戦死者も出た。敵艦の近づくのを待ち構えていた第二砲台員は、このときとばかり敵艦目がけて十二、七糎砲の火蓋を切った。見る見る間に駆逐艦二隻を撃沈、その他の艦船にも相当な被害を与えた。彼我の撃ち合う砲声は正に耳を劈き更にこれに加へて爆撃の響きは島も割れんばかりの轟音であった。午後四時に及び敵艦艇も遠ざかり爆撃も止んだ。宵闇迫る頃輸送船の煙が南から北に移動するのが見えたが「今夜は必ず上陸して来る」と再び決戦の覚悟を決め、一同それぞれ身仕度をした。砲爆撃の音も去り、静まり返った中に本部から「総員配置に就け」の命令が伝はり、今夜の敵上陸に対する防備態勢を整え、それぞれもち場についてまんじりともせず上陸用舟艇の接近を待った。嵐の前の静けさとはまさにあの時の事だと思う。

午後七時頃であったか第四トーチカ側の十五糎が突然大音轟を放った。誰しも敵上陸と察知した。しかし更によく海面をすかして見ると、小波が月光に輝き恰も上陸用舟艇が押し寄せて来るように見え、誤認と判った。そんなこともあって当夜は一睡もせず緊張した気持ちで待ち構えていたが何事もなく夜が明けた。

それから連日小型機の反覆爆撃と艦砲射撃に見舞はれ島内到るところ施設建物は粉砕されたので、われわれは地下に寝るようになった。

この砲爆撃で当惑したのは滑走路と弾薬燃料糧食等の爆砕されたことだった。それでもわれわれは味方機の救援をたのみ昼夜を分たず滑走路の復旧整備に従事したが遂に最後まで味方機の来援は得

られなかった。

日中は小型機の爆撃、夕刻は艦砲射撃、夜間は大型機爆撃と引き切りなく繰り返されたのに上陸しないのを不審に思ったが、三、四日経って敵はクェゼリンに上陸したという報を受け本島への攻撃は牽制作戦であったことが判った。

二月十三日この日は八機のB25が内海から低空で侵入し、機上から三八粍の銃弾を撃ち乍ら、猛スピードで島の上空に達し一斉に六〇キロ程度の爆弾を投下して外海の方に一気にとび去った。それが運悪くコンクリート建の八〇二空の本部電信室にとび込み炸裂したため、階下の防弾室に避待していた八〇二空の鴨司令外十数名の戦死者と三十余名の負傷を出した。

敵は今迄波止場とか弾薬庫、砲台、機銃陣地等を目標に爆撃していたが、この日は低空で本部を爆撃したので、こんどは残存建物をやり出したと思った。しかし本部以外の建物には人も物もなかったその頃から糧食品の貯蔵量に対して不安を感じボツボツ南瓜、とうもろこし、コーリャン等の農耕を始めた。

三月十七日に潜水艦の補給があるというので喜んで夜陰に乗じ大発に作業員を乗せ、指定された環礁外の地点に糧食受取りに出た。ところが突然発砲され、見れば敵の潜水艦が待ち構えていたのだった。夜間砲撃であるので本島からも敵味方の曳痕弾が見受けられた。食糧補給も結局失敗に帰した。

これは味方の電信を傍受されたため味方潜水艦が途中で敵の攻撃を受けて現地に来られず、それを敵側が利用して、裏をかいたものであった。

潜水艦による糧食補給が失敗し補給のあては殆んどない。その頃から手持糧食の食いのばしということとなり、米に代り南瓜とうもろこしが配給されることとなった。愈々農耕による自給自足戦が始まった。ところがそれをまた敵に知られ空襲のとき焼夷弾を投下し農作物焼打ちの挙に出た。たとえ農耕によっても、隊員が満足する収獲は望まれないのに、こんな窮状となり、六月頃から栄養失調で斃れる者もボツボツ出始めた。

漁獲も本格的に始めたが、空襲の最中での漁獲も、農耕も決して楽なものではなく体力も次第に衰へ、遂に十九年八月頃からは毎日死亡する数が多くなった。

その間にも敵は攻撃の手を緩めることなく全島椰子林であったウォッゼ島もすみからすみまで丸坊主のように焼き尽されて、唯一の食糧だった椰子も思う様に手に入らなくなり、遂に雑草や鼠まで喰う様になった。

朝起きると昨夜の空襲で被害のあった畑を再耕し、種子を播いて農耕する。夜は疲れた体を防空壕に横たえて空襲されても作物に被害のないように、自分は餓死しても内地の安泰を祈るというような全く絶望的な悲惨な毎日が繰り返えされた。

十九年の八月末には連合艦隊から「情況これを許せば十月には補給する」という連絡があり、一時隊員の意気は軒昂たるものがあったが、九月には台湾沖の海戦がはじまり又々諦めなければならなかった。

二十年三月には硫黄島の玉砕を知り、内地までその爆撃が熾烈であるという放送をきき、心身共に疲労困憊その極に達した。この年一月から五月頃までの死亡者が最も多かった。六月になって漸く自給自足の出来る見通しはついたが、これとても爆撃されれば直ちに飢えるというような状況であった。

その頃の空襲は毎日行はれてはいたが場所が一定し「米軍の飛行士の爆撃練習を実施する」というビラを撒いていたので農作物の被害は殆んどなかった。

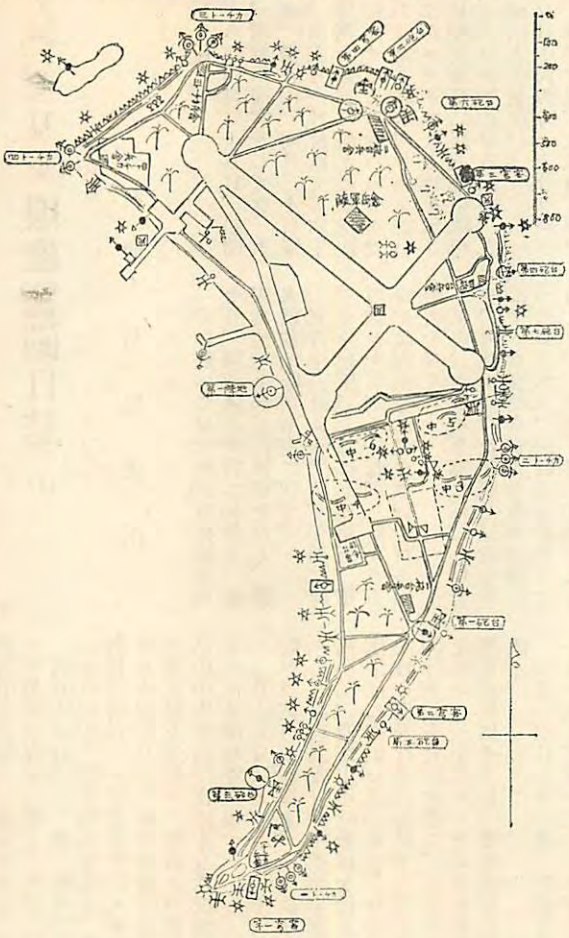
その後生き残った者は元気も増し、体力も大分復調したが常人の比ではなかった。かくして終戦を迎えたが当初三千余名であった在島員中生還したのは僅か千余名に過ぎなかった。

ウォッゼ島が本格的な艦砲射撃を受けはじめた十九年一月末の隊員は次の通りであった。

軍人は海軍約二八〇〇～三〇〇〇名
陸軍約　一二〇～一五〇名
軍属は約二〇〇名
朝鮮工員一〇〇名

（註・筆者は現厚生省援護局審査第二課勤務）

ヴォッゼ島防備要図（18.10現在）



平和なるきそをつくりし
つわものの
永久に輝く
霊ぞ尊し

福井市境町故梅田伊一妻
梅田清子

「玉砕島の砂を頂いて」

涸れ果てし　涙新たに　君の魂
砂に還りて　わが掌にやすらぐ
東京　荒井　福栄

クェゼリンの霊砂をうけて

血の記憶　遠くク島の　砂白し
群馬　泉谷　スミ

クェゼリン環礁警備日誌 (1)

文学博士　有馬成甫

一、着　任

昭和十八年四月二十五日、船団を率い、運航指揮官としてラバウルに入港。滞在中、同月三十日電報にて、明五月一日付にて第六十一警備隊司令兼第六潜水艦基地隊司令に転補せらるる旨の命令を受く。直ちに第八艦隊司令部を訪い右任地はクェゼリンなる旨を示さる。一旦現任地第二海上護衛隊司令部（トラック）に帰るため、五月二日幾内丸に乗組む。

五月三日午前四時三十分ラバウル出港、摩耶山丸、辰武丸、国川丸と共に、五隻にて船団を組み、トラック島に向う途中偽航路を採り、之字運動を行いつつ北上し、五月六日午後五時三十分、トラック環礁南口より入港、投錨上陸し司令部に帰着す。

五月十日（月）晴、飛行艇にてトラック島を出発、午前五時十分離水、高度約三千米にて東方に向ひ、午後〇時二十分クエゼリン環礁内、ルォウト島に着水し、午後一時十五分離水、同一時四十五分クェゼリン本島に着水し潟艇に移乗して上陸、第六十一警備隊員の出迎敬礼を受けて同司令部に着任、前任司令成田大佐と申継を交換し、准士官以上の伺侯を受け、次て総員集合成田大佐より紹介並に離任の挨拶、予着任につき訓示を行ふ。

交代終って第六特別根拠地隊司令官、阿部孝荘少将に伺侯し、参謀其他司令部員に挨拶をなし、潜水艦基地隊司令室に宿す。

五月十一日（火）晴、午前二時三十分起床、北部にある第三、第四砲台を見廻る、毎朝三時より五時迄戦闘配置に就き教練を行ふ由報告を受く。

午前、六根司令部に行き打合せ、阿部司令官及幕僚と昼食を共にす、食後司令官より教育訓練につきお話あり、㈠敬礼を厳格にすること、㈡武道を奨励実施すること、㈢水泳競技を行ふこと、その他、人事のことなどに付いてなりまた築城作業に関する打合あり、近々着手の筈にて工事主任は警備隊司令、即ち余に命ぜらる。

五月十二日（水）晴、午前二時三十分起床、第二砲台を見、それより自動車にて第一砲台を見る。午前警備隊の諸施設を巡視す、第八艦隊司令部より第十四戦隊当方面に派遣増強せらるる旨の通知伝達せらる。

五月十三日（木）晴、大本営情報、昨十二日敵一個師団熱田島（アッツ島）に上陸交戦中、霧深く飛行機使用出来ず、我に有利なりと。第二警戒配備に就く。午前築城本部員北村陸軍工兵少佐の案内にて着手予定の野戦築城地点の実地踏査を行ふ。夜間各砲台の射撃指揮官を会同し、指示を与ふ、終って警備状況を巡視す。月清し。

五月十四日（金）曇、午前二時三十分起床、第四砲台を見る、砲台長は新らしく配置変更にて着任せる少尉なり。午前潜水艦基地隊の諸施設を巡視す。照島丸砲艦長畠山中佐来訪。夜に入り六根参謀と共に各陣地を巡視す。

五月十五日（土）、晴、午前三時第三砲台を巡視す、砲台長は新らしき兵曹長なり。午前戦車擲弾筒小隊、及び山砲隊教練を行ふ。南地区に進出し第二砲台に移る、中攻一機飛行場に着陸す、司令部に行き司令官に申告し、小泉少尉をルォット十二サンチ砲台射撃指揮官に転出せしむ。築地実施計画成る。

五月十六日（日）晴、午前三時島を一巡し、第一砲台の操練を見る。午前五時第三警戒配備となる。午前七時敵機らしきもの一機、北約二〇、〇〇〇米に見ゆ、八時三分敵大型機七機大鳥島に来襲、同五六分敵機撃退、一機十浬沖に不時着、捕獲に向ふ。クェゼリン神社に参拝正午准士官以上を集合、築城本部員北村陸軍少佐より説明を聞く、明日より築城作業を始むる準備なり。夜六根司令部を訪ふ。同刻山門丸永興丸入港第三十一キャッチャーボート（捕鯨艇）第八掃海艇光島丸出港。

五月十七日（月）雨又曇、午前四時、第一見張所に登る、野戦築城工事を開始す、本日は説明を加え乍ら、中央地区より始む。六根司令官を訪ふ。第四艦隊司令部当方面に進出し来るやも知れずとの事宿舎の準備をなす。連合艦隊司令部は横須賀に向へりと云。南東方面、トラック方面部隊員の私信はハガキに限られ封書は禁止せらる。夜、前警備隊司令成田大佐の送別宴を催ほす、「高砂」を舞ひ「鉢の木」の離別の句を謡ふ。

五月十八日（火）曇、午前三時成田大佐の出発を見送る。未明より築城工事を初め、砲台を一巡す午前七時司令部にて第四艦隊進出の際宿舎その他の打合を行い、次で現場視察、初めて水泳をなす。夜六根司令部を訪ふ。本日午後二時タロアを出港せる光島丸は港口にて雷撃を受けたりと云。

五月十九日（水）曇、午前二時半起床、三時より第四及び第三砲台を巡視す。七時第一、第二、電波探信機（レーダー）巡視す。築城工事巡視、杵崎艦長神野則之大尉（予備）来訪夕食に招待。夜歓談す。昨日雷撃を受けたる光島丸は沈没せず曳航してタロアに入港せりと云。

五月二十日（木）晴、午時三時第二砲台第一砲台を巡視し、築城工事を見、警備司令室に移る。

午前各砲台長を集め、空襲待機方法教練の基準を示す。午後興津丸監督官清水柳太郎大佐、石廊艦長（某）、駆逐隊司令戸上虎次大佐来訪、明早朝、興津丸、石廊を曳航してルォットに赴き、二十日出港、サイパンを経て呉に向ふ予定。午後二時右艦長、司令を伴ひ、クェゼリン神社に正式参拝す。神官は建築部技手（某）司祭す。

五月二十一日（金）曇、午前二時半起床、クェゼリン神社に参拝築城工事を巡視す。午後建築部に至り、第四艦隊司令部の間取決定す。杵崎艦長神野大尉に招かれ、同艦に赴き夕食を共にす。昨二十日午後一時三分ヤルート港外にて雷撃を受けたる盤谷丸は南海部（陸軍）乗込み居り、火薬の誘発にて瞬間的に沈没、艦長は稲上信壮大佐なりしと。

五月二十二日（土）晴、山本連合艦隊司令長官戦死と、海軍省より発表せらる。去る三月三十日、トラックより飛行機にて近日南方へ出撃の由を聞き予は旗艦武蔵に、御別れの意味を含め訪問し、大に歓談を尽したりしにそれが永久のお別れとなりしかと思へば、痛惜悲嘆の情に堪えず。江田島以来、半世紀に亘り交情綿々、その人物は特に印象深く、一世の人傑というべしと信ず。午前南砲台を巡視し、午後水泳、夕杵崎艦長神野大尉、警備副長上高原大尉及機関長と夕食を共にす。

五月二十三日（日）曇、午前三時起床。午前、第一砲台長を呼び哨戒射撃法につき調査せしむ。午後第三、第四砲台長を呼び、同じく試問、六根司令部を訪ふ。杵崎艦長明日出港につき挨拶に来る。夕運輸部長を訪問す、水泳をなす。体重六五キロ。

五月二十四日（日）晴、築城作業、本日より戦車壕に着手す。午前六根司令官と共に、士官移転宿舎の位置を検分決定す。北砲台築城工事を巡見、司令部に行き北方（アリューシャン）の戦況を聞く。

筆者経歴　元海軍少将、昭和十八年五月一日第六十一警備司令兼第六潜水艦基地隊司令、昭和十八年九月十四日横須賀鎮守府附

昭和四十一年二月六日

靖国神社 慰霊祭の計画

今年の二月六日のことは、環礁二号で御報告しました。六、七十名の参加かと考えていたところ、二倍以上となったためお祭りの直前になって場所や行事の一部を変更し大変御迷惑をおかけしました。来年は更に増えるのではないかと役員は張合いのある心配をしております。増えるというのは、最近連絡のついた会員が増えたのと、二月六日が丁度日曜日に当るからです。当日の行事について既に今夏靖国神社に申込ずみであります。

午前十時靖国神社参集所に集合。
お互いの為、時間は守りましょう。

拝殿において修祓の儀
英霊諸勇士の親しまれた歌を一同で合唱奉納。歌詞は用意します。伴奏はNHKに交渉中。

本殿に昇殿
御饌・御酒を捧げる
斉主による祭詞奏上
玉串奏奠

靖国会館に移動し　昼　食

定期総会

講演「マーシャル諸島の戦斗概要」

懇談

映画「靖国の四季」
十月九日霊砂帰還のテレビ再放送

終了は午後二時の予定

九段会館に宿泊　希望の方は、宿泊月日と氏名男女別を同封のはがきに書き入れ、一月一日迄に御投函下さい。その後の変更は、本部に速報して頂きます。

昼食　は本部で準備し、その実費一五〇円は、当日頂きます。昼食不要の方は、その旨お書き添へ下さい。

定期総会において審議予定の 本会会則の一部改正案

一、改正を必要とする理由
既述のとおりマーシャル諸島におけるクェゼリン、ルオット、ブラウン三島以外の諸島で戦歿された英霊の御遺族中本会に加入を希望される方が相当多数おられます。同じ立場の我々は喜んでお迎えいたしたいと思います。

二、改正後の会則案（傍線は変更個所）

クェゼリン方面戦歿者遺族会会則（案）

第一条（名称）この会は、クェゼリン方面戦歿者遺族会といいます。

第二条（事務所）この会の主たる事務所は東京都に置き、必要に応じ全国各地に支部を置きます。

第三条（構成）この会は、太平洋戦争中マーシャル諸島クェゼリン島（エニブージ島・エビゼ島を含む）・ルオット島・ブラウン島およびその他の島で戦歿した者の遺族を会員として構成します。

第四条（目的）この会は、前条に示す戦歿者の英霊をお慰めすることを目的とします。

第五条（活動）この会は、次の活動をします。
一、昭和三十九年二月六日靖国神社において二十年祭を行います。
二、毎年二月六日、靖国神社において慰霊の祭事を行います。
三、第三条に示す諸島に残された遺骨を収集し、各島に忠魂慰霊塔を建立します。
四、会員の相互扶助および親睦をはかります。
五、戦記、戦歿者名簿、遺書文集、写真帳等を刊行します。
六、その他この会の目的達成に必要なこと。

第六条（機関）この会の機関は、次のとおりとします。
一、総　会
二、役員会

2. 定期総会は、毎年二月六日靖国神社で開催します。
3. 会長が必要と認めたときは、臨時総会を開催します
4. 役員会は必要に応じ随時開催し、会務の企画、運営実施にあたります。
5. 各会議は会長が招集し、議事は出席者の過半数によって決します。

第七条（役員の種別、職務および給与）この会に次の役員をおきます。

一、名誉会長	一名	
二、会　長	一名	
三、副会長	若干名	
四、常任幹事	二名	
五、幹　事	若干名	
六、監　事	二名	

2. 会長は、この会を代表し会務を統理します。
3. 副会長は、会長を補佐し会長に事故あるときはその職務を代理します。
4. 常任幹事と幹事は、会長の指示により会務を分掌処理します。
5. 監事は、この会の会計を監査します。
6. 役員には給与を支払いません。

第八条（役員の選任および任期）役員の選任は、次のとおり行います。
一、名誉会長、会長および監事は、総会で会員の中から選任します。
二、副会長、常任幹事および幹事は、会員の中から会長が指名します。

2. 役員の任期は、二ケ年を一期とし、再任できます。

第九条（顧問および相談役）この会に役員会の決定により顧問および相談役をおくことができます。

第十条（経理）この会の経費は、総会できめた会費、寄附金およびその他の収入によって支弁します。

第十一条（会計年度）この会の会計年度は、毎年一月一日より十二月三十一日までとします。

第十二条（決算）この会の決算は監事の監査を経た後総会に報告されその承認を得なければなりません。

第十三条（諸記録）この会の会務および会計は正確に記録され、会員はいつでも閲覧することができます。

第十四条（支部の設置）この会の支部の設置は、会員の要望により、役員会で定めます

第十五条（支部の機構および運営）この会の支部の機構および運営は、会長の承認を得て支部で定めます。

第十六条（会則の改廃）この会則の改廃は、総会で行います

第十七条（解散および残余資産の処分）この会は、総会出席者三分の二以上の同意により解散します。

2. 解散の際保有する資産は靖国神社に奉納します。

附　則

一、この会則は、昭和三十八年六月二十九日から施行します
二、この会の設立に要した費用は、初年度の会計に包括します。
三、この会の第一期の会計年度は、昭和三十八年六月二十九日より昭和三十九年十二月三十一日までとします。
四、この会の第一期の役員は設立総会で選任し、その任期は昭和三十九年十二月三十一日までとします。

遺作と会員だより

（宮城県）妻　**渡辺　雪子**

紅葉に満ちる折柄社会公共のための御精励お慶こび申し上げます。私事過般当地新聞にて霊砂帰還のこと拝見いたしました。戦死された夫の遺骨はもとより何一つありません。せめてその印のみだけでもと念願していましただけに早速お願いいたした次第でございます。幸い各位の御熱意によりまして霊砂をお届け下され、正しく受領いたしました。衷心より深くお礼申し上げます。この上は霊砂を拝する毎に国家の安泰を祈願いたし明るい社会建設のため努力いたすのみでございます。ありがとうございました。（ウォッゼ）

（岐阜県）兄　**戸田　敏雄**

拝啓今回霊砂お送届けについて誠に御配慮煩し厚く御礼申し上げます。実は前々から外地における遺骨収集並びに英霊を慰めるために各地え出掛けられましたが、クェゼリン方面のことは一向に新聞その他報道機関にも載らないのでしたが、許されるならば是非とも参りたいと考えておりました。然るに今回貴会からのおしらせによって該地には未だ行かれないとのことその事情はわかりましたが、将来行けることになったならば是非ともその一員にお加へ下さるよう切にお願い申し上げます。（ウォッゼ）

（宮城県）母　**二宮きよの**

先日は霊砂、墓地写真および環礁お送りいただき誠に有難うございました。私共一同私の息子の霊である霊砂を前に肉親および知人を招き供養ともども故人の想い出に耽っておる次第でございます。

戦後二十年の歳月の流れた今日、あのような激戦地の霊砂が遺族の手に渡されようとは夢にも想像しておりませんでした。また戦歿者の英霊を慰めるための遺族会が発会いたしたことも知りませんでした。この遺族会の御尽力によって遺族の手に霊砂が配送されました。その御厚意に対し厚く感謝いたします。（クェゼリン）

（神奈川県）妹　**石原さと子**

東京にまいりますまでは、砂の送られてきました三つの島の中の何れかに兄が入っていたならばと僅かながら期待をかけておりました。しかし兄はやはりブラウンであるとお聞きし正直なところ一寸がっかりいたしました。しかし役員の皆様の御努力によって上映されたスライドによってマーシャル諸島の一部を見せていただきました。ブラウンという島は地図にもはっきりのっていない小さな島ゆえ、なおさらどんな島だろうまた今はどうなっているのだろうかと心に思っておりました。何もわからなかったわけでありますので、あのスライドを見せていただき本当によかったと思います。環礁一号二号を頂きまして隅から隅まで全部拝見させていただきました。二十年祭の様子また種々の分野で書かれております資料にただ〳〵頭の下る思いでございます。さぞかし地下の霊も喜んでおられることでしょう。クェゼリン、ルオット、ウォッゼの戦歿者の皆々様が羨しくさえ思われますが、本部の方々の御苦労はなみなみならぬものとお推察いたしております。

這えば立て立てば歩めの親心とでも申しましょうか、何も判らぬうちは、それほどとも感じませんでしたが、少しでも判りますとなおその上希みたくなります。無理は重々承知の上でこんなお願いをいたしますのは誠に恐縮に存じますが、ブラウンの写真または今の様子を聞かせて下さいますようクェゼリンの指揮官にお願いしていただけませんでしょうか。ブラウンの戦歿者遺族の方々はきっと私と同じような願いを抱いておられることと存じます。ブラウン戦歿者遺族全員の声としてお取り上げ下さいますようお願い申し上げます。叶わぬ願いとは思いながらまた心の隅にはもしやと小さな望みを捨てきれず、こんな手紙を書きましたが悪しからず。

まもなく父の命日で帰郷いたしますが兄の霊砂としてお供えするため田舎に持ってまいります。

終りに一日も早くマーシャルの島々に慰霊碑の立ちます日が、来ますようお祈りいたします。（ブラウン）

〔一頁よりつづく〕

たものになります。内地のトロロを思い出し乍ら食べたりしました。何しろ食料が慾しいですから、出来得る限り送って下さい」という手紙も二三度受けました。

又、「この島ではお金の使いようがありません。それで私の本俸は、内地で受取っていただくように手続きをしました。これはどうぞお母さんがお使い下さい。お母さんのお好きな旅行や、観劇の費用に使って下さい。決して僕の貯金等と考えないで下さい」と。

又或時は「敵の攻撃もおひおひ激しくなり、何時どういう事があるかも知れぬというような気も致します。どんな場合にも人におくれを取るような、恥しいことはしませんから御安心下さい」。といって来たこともありました。その年の十一月の頃だと思はれますが、「近くの島の玉砕の報を聞いて、朝夕たゆみなく訓練をしたかいもなく、玉砕の憂き目にあった戦友のことを思うと、涙なしにはいられません」。という述懐をもらして来たこともございました。

又「自分が配給を受けたタオル等を、内地は品不足だそうだから配給品ですがお送りしましょう」と小包を送って来たこともありました。それはその年の十月以前のことでした。

その年の十二月から翌十九年の一月にかけて、中々手紙もまいりません。十九年の一月に入りましてそろそろ満一年になるなァと私は考え乍ら彼の身の上のみ偲ばれてなりませんでした。一月の半ば過ぎ、或朝まだき私は夢を見ました。彼は制服制帽のいでたちで慌しくどこからともなく現れ「お母さん！お母さん！喉が渇いてたまらぬからお酒を下さい」と慌しげに云いますので「今急ではお酒の用意は間に合わぬから、水でもあげましょう」と言って水を取りに立とうとした瞬間、夢は消え本人の姿が失せました。これが私には最後の暇乞いに来てくれたような気が致してなりません。

この一月の末に湛山が、持病の三叉神経痛の発作が起り私がつき添って大阪の阪大病院に治療に出かけました。宿はいつもの通り新大阪ホテルに泊りました。治療の結果、病気はおさまり、いよいよ東京帰宅の二月二日の朝でした。当時湛山は、東洋経済新報の社長を致しておりましたが、大阪支局の社員が宿舎に見舞に来てくれまして「マーシャル群島で大激戦があり、日本軍全滅という情報が出ています！」と云って新聞をもって来て見せました。此の痛ましい報道が事実となって、二月六日、クェゼリン島玉砕の報道を聞き、その痛ましさに耐えがたき思いに耐え乍らも、私は残る遺族の為に自重を続けて今日に到りました。

世の大ぜいの遺族の方々一人一人の胸の中に、戦争の為に再び帰らぬ父、或は兄、或は弟又我子を失はれた思いは、世にある限りその悲しみの消ゆることはありますまい。あたら有為の人々を失った国家も最大不幸なものと思います。今後再び戦争等ということのあり得ないように、と念願する次第であります。

ウイリアムス氏に想う

土屋太郎

ウイリアムス氏は、環礁二号で紹介されたように、ルオット島の作戦に参加した米軍の一人です。当時は戦争という止むを得ない事情により、互いに敵として戦いましたが、同氏もやはり当時は戦死を覚悟して上陸を敢行した者の一人です。殊に昭和十九年二月十二日わが軍が夜間爆撃を決行したときは、島内に連続大爆発が起り、生きた心地がしなかったといっております。その後、彼は私のいたウォッゼ島にも数回飛来したとのことです。

私が、同氏から初めて手紙を受取ったのは昭和三十六年でした。「われわれは、互いに敵として戦かったけれども、これは決して個人的憎しみによるものではない。戦死された方たちに対しては心から哀悼の意を表したい」といっていました。その後四、五十回文通し今では手紙の上だけですがすっかり友達になりました。

書斎でのウィリアムス氏

同氏も終戦後は、数回職を転々としましたが、現在では技術者として米海軍に勤めています。

昨年二十年祭が行なわれるに当り、「ケゼリンの写真をお持ちだったら送ってもらいたい」と頼みましたところ、早速ケゼリン、ルオットの地図と写真を送って参りました。又同時に、「そのうち必ず現地の砂を取りよせてお送りするつもりだ。戦死された方たちも現在では既に島の土と化しているであろう。せめて遺骨の代りにでも……」といってきました。その後の経緯については、すでに会報等に報告されたとおりです。

遺族会のおかげで、ケゼリン、ルオットのみでなく、私のいたウォッゼ島の霊砂も送って頂くことができました。ウォッゼ島では約二千名の戦死者がありました。私と同じ分隊の者も百七十名戦死しました。内地帰還直後の日記に、「戦死者と同数の数珠を作り常時身につけておくこと。」と記していましたが気にかかりつつも未だに実行できずにいます。この度幸いにもウォッゼ島の霊砂を分与して頂いたので、「靖国神社昇殿祈請神霊」とともに机上に掲げ、毎日その霊を拝しています。

戦歿者の御冥福を祈るとともに、御遺族の方たちの御多幸を祈ります。

（海上自衛隊・一等海佐・広島県江田島・第一術科学校教務部長・本会篤志会員）

ウォッゼ島戦歿者慰霊祭について

荒尚久

今回靖国神社において開催しました標記の慰霊祭は終戦二十周年を期して昭和三十二年以来第二回目の行事でしたが、菊花薫る十一月三日を選んだのが幸いしてか、北海道・九州或いは裏日本と全国から戦友約一〇〇名及びウ島在駐各隊の遺族代表十二名が参集しました。

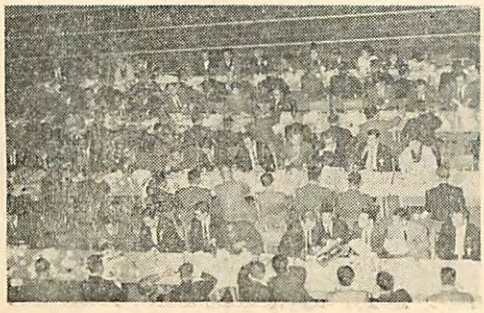
定刻十一時半に参集所から参殿し、各隊代表者及び遺族代表者の玉串奉奠と同時に一同が戦歿者の御霊に敬虔なる祈りを捧げたのであります。終って靖国会館前にて総員の記念写真をとり、引続いて同館内で遺族を中心に昼食を兼ねての懇談会に移り、先づ吉見元海軍少将（ウ島司令）の開会の辞に始まり、続いて遺族代表者の挨拶その他有志による余興等あって、約二時間の間懐旧談に花を咲かせ、終りに佐々木元海軍大佐の閉会の辞そして軍艦マーチの合唱を最後に十四時半頃、再会を期して訣別しましたのが大体の行事内容です。

本慰霊祭の特異性としては、土屋太郎氏（元海軍少佐・現海上自衛隊一等海佐）の絶大なる御協力により、ウ島の戦前、戦後の写真約二〇〇枚を懇談会々場に展示されたことでありました。このため殆んどの者がこれら写真のとりことなり懇談会の開始が遅れたような一幕がありました。

この機会にウォッゼ島戦歿者の御遺族に御連絡申上げたいことは、本誌に掲載されているウォッゼ島の霊砂配分の件であります。これにはウ島生存者有志が鳩首相談の上、吉見元ウ島司令の御同意を得て、全面的にクェゼリン方面戦歿者遺族会にお願い申しあげることに致しました。霊砂入手希望の方は、同会あて御連絡下さるようお願い申上げます。なお同遺族会への御加入は御自由であることを申し添えます。

（ウ島戦歿者慰霊祭世話役　元海軍大尉）

続々参着の会員と遺族、参集所受付にて



靖国会館での懇談会

靖国会館前で記念撮影

本会当面の企画

会員の念願の一端がかなって、思わないお欣びをいただきました。まだまだ目的を達するまでには途が遠いのですが差当りは

㈠ブラウン島日本人墓地からの霊砂と写真の入手

㈡ウォッゼ島日本人墓地の写真の入手

㈢マーシャル諸島中他の島（マロエラップ島・ミレ島・セルート島その他）の霊砂と日本人墓地の写真の入手（本会の構成員ではないがクェゼリン司令官への接渉のついでがあり、同じ遺族として御力添すべきと考へ）

㈣マーシャル諸島全域に亘り日本軍人軍属の遺骨収集・送還

㈤クェゼリン本島・ルオット島には米軍の友情によって日本人墓地のあることを知った。恐らく他の島にもこれと同じ取扱いがされていると考えられる。清楚な垣を廻らし、南国特有の浜木綿を植えてその霊が慰められていると思うが我々の習慣による墓石がない。そこで我々の望む碑を建てたい。サイパンからの書簡（12）頁により会員の渡航が許されなければ碑を現地に送付して建立を依頼する。まづその碑の形について御意見を承りたい。

㈠従来多く見るもの　㈡自然石に刻む

㈢所謂忠魂碑　㈣外人墓地に見る平地に平に置く

遠い将来は別とし、ここ当分我々会員の訪問は困難らしく、清掃等も米軍に依頼する外ない。この場合米人の好まぬものであるとしたらお守りはもとより、こわされても困る。従って米側の意嚮も容れるべきではないか

㈥墓地には日本の草花を植えて常夏の島に、懐かしい四季の色を添えて英霊を慰めたい。このため種子を現地に送り依頼する。

以上はサイパン書簡によりクェゼリンの司令官に直接接渉すればよいので遺族会本部から早速照会中です。

㈦現地慰霊がさしあたり望めないことは一応了解するが、宿舎などには期待を持たないので事情許されたら何をおいても、一日も早く実現できるようサイパンにお願いする。

碑の形はどうするかその他本件につき御意見を同封のはがきで本部に御通知下さい。

戦歿英霊の郵便貯金調査事務について

環礁第一号の11頁に掲載してお知らせした例の軍事郵便貯金のその後のことです。あのときは千十名の調査をお願いし二百一名の戦歿者の預金が遺族の手に戻りました。その後資料準備をつづけ十一月十一日五、八二〇名の調査を郵政省に願い出ました。

郵政省で調査の場合戦歿者の氏名、留守担当者氏名、続柄、その現住所は最小限の必要資料です。これを少くとも三部は作る必要があります。本部では気になり乍ら六千人近くの資料作製は容易でないため用紙だけ準備しながら着手にふみきれませんでした。

この情況を耳にされた会員中の佐竹エス様（本籍山形県、御主人はルォット島で玉砕戦死・現在は東京都品川区立立会小学校の先生）が申出られ本年七月はじめから、夏期休暇の全期をこの資料製作に傾注して下さいました。六千名近い方を五十音に並べ、カーボン紙を入れて三通の浄書は酷暑の候、御婦人としては大変であったと存じます。

前記のとおり十一月十一日に郵政省に願出に上りましたが、貯金局の黒田猛第二業務課長が審さに情況を御聴取下され早速調査して下さる由であります。原簿保管の熊本局では百六十六万以上の原簿の中からさがし出す作業は容易ではないと思います。

他に本職をお持ちの郵政職員の御親切による御調査なので完了まで何日かかるかなどは見通しつきかねますが、一応来年五月末までに判明した結果を頂戴し環礁四号で御知らする予定にしております。お盆に英霊からの贈りものが何人の方にまいりますか期待されます。

ウォッゼ島の戦歿者の方全員と、クェゼリン・ルオット・ブラウン中一部計五千人の方は申しわけありませんが、次回になりますことをおわびかたがた申し添えます。

貯金のあることがわかる方とその御遺族には熊本或は他の貯金局から「郵便貯金払いもどし証書」というのがお手元に届けられ、お近くの郵便局で御受取りになることになります。

遺族会名簿の刊行について

本会はクェゼリン・ルオット・ブラウン及びウォッゼの戦歿者、陸海軍を合わせ約一万五千の資料を集めました。

本籍、生年月日、所属部隊名、戦死場所、遺族名、続柄等概ね整備しております。

従って戦歿者全員の部隊別名簿とか本籍地別名簿とか作ることは可能であります。ただ、どんな細字を用いても全員の名簿を印刷することは費用の点から考えても無理と思います。

又遺族の氏名は判っていても、その住所が戦死公報を発送したときのものですので、必ずしもお互い連絡のとれる正確さは疑問です。それは遺族自身の死亡その他戸籍事項の異動、又戦災その他の転居等によってであります。

現在の遺族会名簿というのは一昨年以来何がしかの方法によって本会に連絡のとれた方のみを集録したものであります。

第一回は二十年祭当時のものでその後本年一月と七月、環礁発行毎に加除訂正表をお送りして、現在一五〇〇名に近い方の①戦歿者氏名②続柄③遺族氏名④遺族現住所を都道府県別に集録してあります。

切角名簿はあっても①都道府県内の並べ方が五十音順でないので使いにくい。名簿とその追補と二冊の加除訂正表の四カ所を見なければ用を達しない等不便の多いことと所属部隊のないことが物足りないという御批判が相当あります。

そこで皆様の御希望を承って、多数のお望みのようでしたら改版してお領け致そうかと存じます。

今のところ本部での案は

一、遺族会本部に御連絡下さった方は全員掲載する。

二、戦歿場所がマーシャル諸島の方はクェゼリン、ルオット、ブラウン以外の方も御希望によって全員掲載する。（約二千人）

三、名簿の大きさはB5判とし、従来通り二つ折を縦方向に使用し、横書きとする。

四、刊行の時機は明四十一年一月一日現在とし、二月六日印刷を了へ配布する。

五、都道府県内は部隊別でなく五十音順に並べる。

六、記載事項は

①戦歿者氏名

②所属部隊名

③戦歿場所（島名とする。）

④遺族氏名・続柄・現住所

遺族名は一柱一名と限らず環礁送付を希望される方全部

七、領布価格一冊百円・送料は別とする。

以上のとおりですが、このことについて御意見御希望は同封のハガキに御記入の上御通知下さい。

老人ホームに待つ母の懐へ

井上富美代

斉藤よし様がおいでになる老人ホームが見つかりましてお訪ねし、秀夫様の霊砂を確かにお渡して参りました。

実はその後何とかしてお探しなければと電話帳にのっておりますす所二ヶ所に問い合せましたが、居りませず、どう仕様かしらと気落ちして居りますところへ浮田幹事様のお手紙を頂戴しまして、こうしていては申訳けないと思い、市役所に電話で聞きましたら大変親切に五ヶ所の住所と電話番号を教えて下さいました。一番はじめに教えて頂いた宮倉台の老人ホームに先づ電話しましたら、運良く居るという事務所の方の返事で、嬉しいやら、ホッとしましたりで気が一ぺんにおちて、その日はボンヤリしており、女店員から奥さんどうしたのと笑はれてしまいました。

九日は雨が随分降って居りましてロイマチの私は雨が大変苦手で具合悪く出掛けることなど滅多にないのですが、霊砂を一日も一刻も早くお渡ししなければと出かけました。後で考えてみましたら十月九日に横須賀の三笠講堂に霊砂がまいりまして、丁度一ヶ月目の十一月九日に斉藤よしさんの居らっしゃる老人ホームを訪れることになり、同じ日に霊砂をお渡し出来ましたことは、之も何かクェゼリン島で玉砕なさった息子さんの霊のお導きではないかしらと大変因縁ということを考えてしまいました。

宮倉丘にあります老人ホームは小高い山の上、松林の中にありまして、思ったよりも広々とし明るく、新しいのでホつと安神いたしました。

面会室でわけをお話してお母堂様にお渡ししましたところ大変泣かれてしまはれ老人ホームに入られた頃、心臓を悪くなさったとかで今は薬のお蔭でよくなられたと申しておりましたから、あまり泣かれて又心臓の発作でもなさったらどう仕様かとオロオロしてしまいました。

あまり刺戟になる様にお話して、お体に障っては大変と思いまして、なるべく明るく、さりげなくお話致しますようにつとめましたが年老いたお母堂様の御心中を思いますと、私までもらい泣きしたいように思いました。

よくお話をきいてみますと、お母堂様は六人お子様があったそうで、男五人、女一人。男の中三人は戦死、二人は病死なさり娘さんが一人残って居られるとの事です。今のお嫁さんは長男の嫁だそうです。長男が亡くなればその嫁が親の面倒を見る義務はないとの事で、嫁に悪いから家を出たのだと申して居られました。どう考えても私共には、そんな話は考えられないことで、夫がたとえ戦死して亡くなられても親は親と思い孝養をつくすのが人の道と思いますが、どうしたことなのでございませう。

でも、よし様が老人ホームに入られてから嫁さんも変ってこられて、お彼岸には孫におはぎを持って来させたそうです。「嫁が五年前にこうしてくれたらと思ったけれど、でもおはぎを届けて呉れたことで今までのことは忘れようと思う」と言はれました。

霊砂の事は浮田幹事様のお手紙の内容をお伝えしましたが、それは大変喜んで下さり私も自分のなすべき事を事を果して本当に嬉しく思います。之も浮田幹事様の度々の激励とお骨折のお蔭と心から感謝いたして居ります。

御母堂様は目が白そこひでうっすらとしか見えないそうで、手紙は外の方に読んで頂くそうですが同室（八畳に四人）にいられる方達が良い方ばかりで親切にして下さるのでとても幸せと申して居られました。

三人の息子さんの遺族年金が入りますので、老人ホームに入った方が却って、おこづかいには困らないと申して居られました。

もっともっと身寄りもなく、お小遣いもなく、気の毒なお年寄りも入っているし、元社長だった御夫婦も入っている位だから、昔の養老院よりずっと明るいとも申して居りました。

そのうちに体がしっかりしたら外出して家にも一ぺん帰り冬物も皆もって来て、それで後は家に帰らないつもりと仰言ってましたが、そう仰言り乍ら涙を一パイ出されてやっぱり、お心の中は淋しいんだなと身につまされるようでした。

八十歳になられるそうですが、体さえよければ、来年二月六日は靖国神社にお詣りしたいと申されて居られました。

嫁さんは、老人ホームの係が、あまり面会に来てもらっても、と申したと、言って居られましたのでどうかしらと思ったのですが、ホームの事務所に電話しましたら係の方が、是非面会に来てあげて下さいと申され、安神して伺ったのでしたが、やっぱりお母様は大変お喜び下さり、伺ってよかったと思いました。

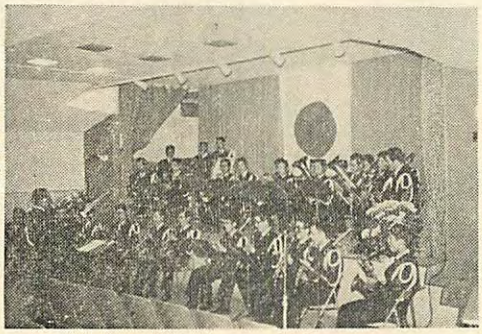
老人ホームが昔よりよくなったとは申しながら帰る道々、並ぶ家をみて、やっぱり御母堂様には温い家庭の方がどの位よいかと思いました。

斉藤秀夫様の霊もさぞ安神して、懐しい夢にも忘れたことのないお母様のふところで眠って居られることと存じます。

ルオット島で戦死した私の兄もまた岡川の母のふところで安らかな眠りをしている事と思います。

斉藤よし様と、岡川の母がやっぱり年老いて三笠講堂には参れませんでした。誰方か女の方でフラッシュをたいて写真をうつしておいでのようでしたが、せめて写真でもと思いおねだりいたします。ただ斉藤様のは目がお悪いので、もし出来ましたらこの便箋位の大きさのをお願いします。

幹事から『ありがとうございました。本会の活動の目標といたします相互扶助とはこのようなことではないでせうか。御示しの写真はすぐお送りしますのでお届け下さいますようお願いします』



お聞かせしたかった三笠での海上自衛隊音楽隊の演奏会

小野寺定右工門

クェゼリンの遺族となりて
気も安し
吾子の笑顔の
影さし見えて

宮城県気仙沼市
小野寺政春の父

ウォッゼ島戦歿者遺族の本会加入歓迎について

「霊砂帰還」に関連し、ウォッゼ島戦歿者御遺族の、本会加入御希望がありました。役員会で検討の結果、同じマーシャル諸島で戦歿の方の御遺族であり、今後の慰霊・遺骨収集・建碑・現地慰霊等本会の目的、行動に御賛同の方は喜んでお迎えしたいということになりました。御承知のとおり同島から帰還された土屋さんからは、本会発足当初から篤志会員として御活躍いただいており、又今回は同島からの帰還者御一同から本会に五〇〇〇円の御寄贈をいただきました。

元ウォッゼ島警備第六十四警備隊司令吉見信一殿以下帰還御一同の御芳志に対し厚く感謝いたしますと同時に、帰還者の力強い御支援によって、力を合わせ一日も早く会員の熱望する目的達成に邁進したいと思います。

明年二月の定期総会に会則改正として提案される予定にしておりますが、御反対等の御意見ありましたら本会あて御通知下さいますようお願い致します。

一九六五年九月二十三日

太平洋諸島信託統治局

高等弁務官M・W・ゴッディング

浮田信家殿

昭和四十年六月十四日附貴下からクェゼリン駐屯軍司令官あての書翰―クェゼリン方面戦歿者遺族会々員に対しクェゼリン・ルオット・及びブラウンにある日本人墓地墓参許可の要請の件―に回答申しあげるよう当局に委託されました。

クェゼリンは作戦行動をしておりますので、御来訪の方々の適当な宿泊施設が皆無でありますため、陸軍省としては今のところ、この方面への御来訪の許可は差し上げられないと考えております。ただし同省ではクェゼリン及びルオットにおける墓地の現況をお判りいただくため同封の写真を貴下に贈呈したいと望んでおります。

墓地について更にこの上御希望がありますなら直接同方面司官と接渉されるようお願いします。

UNITED STATES DEPARTMENT OF INTERIOR
TRUST TERRITORY OF THE PACIFIC ISLANDS
OFFICE OF THE HIGH COMMISSIONER
SAIPAN, MARIANA ISLANDS 96950

COMMERCIAL
CABLE ADDRESS
HICOTT SAIPAN

September 23, 1965

Mr. Nobuie Ukita
2-140 Nozawa-machi
Setagaya-ku
Tokyo, Japan

Dear Mr. Ukita:

Your letter to the Commanding Officer, dated June 14, 1965, requesting permission, on behalf of the Kwajalein Bereaved Families of Tokyo Association, to visit the Japanese grave sites in Kwajalein, Roi-Namur and Brown Island, has been referred to this Headquarters for reply.

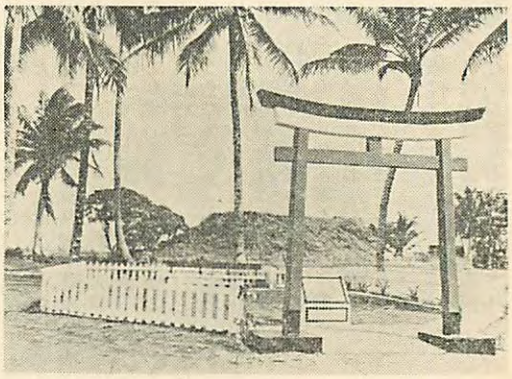
Because of the complete absence of appropriate guest accommodations together with the activities on Kwajalein, the Department of the Army feels it cannot grant permission to visit this area at this time. They do, however, wish you to have the enclosed photographs showing the actual cemetery sites on Kwajalein and Roi-Namur.

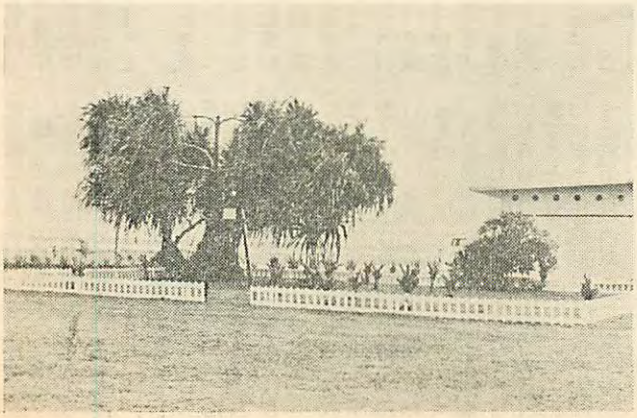
Any further inquiry with respect to these cemetery sites should be directed to the Commanding Officer, Kwajalein Test Site, APO San Francisco 96555.

Sincerely yours,

M. W. Goding
High Commissioner

Enclosures





写真説明

上はルオット島ニムル地区における日本人墓地、左はクェゼリン島西部における日本人墓地の全景である。何れも昭和四十年年八月二十日米軍の手によって撮影されたものでゴッディング氏書簡に同封されて来たものである。実物は20センチ×25センチ。

ウイリアムス氏からの便り

昭和四十年十一月十一日受

九月四日附のお手紙と十月十日附の絵葉書拝見しました。今日までお便り差上げず失礼いたしました。私の失礼を御寛容下さい。

八月二十四日（火）**あまつかぜ**が、オックスナードに寄港しました。翌二十五日夕刻家内と私と私の親友マクミラン栄子さんとが菊池艦長の御招待で艦を訪問しました。外にも一〇〇人ほどの人が招待されておりました。様々な豪華な日本料理とビールとお酒で非公式のパーティが行われました。艦は綺麗に飾られ甲板には天幕を張られとても楽しい夕でした。晩餐の終りに菊池艦長にお訣れを申しあげ、そして艦長の御親切と御歓待の御礼を申しあげました。

九月五日は**あまつかぜ**から三人の士官の方を私の家とマクミラン栄子さんの家にお招ねきしました。マクミラン夫人は朝ロングビーチまで行って皆さんをお呼びし、オックスナードにお連れしました。その三人というのは稲田、大谷、中村三大尉でした。その晩私達はカマリオに同行し、日本レストラントで夕食をしました。そのあと私の家内と私とで三人の士官をロングビーチ碇泊のお艦までお送りしました。とても楽しい一日でした。

沢山の写真をお送り下され有難うございました。とても珍らしく又とても嬉しうございました。九段会館のステージにおけるあなた、靖国神社における土屋大佐の写真は嬉しく拝見しました。私達は特にお宅の庭であなたと奥さんとが花の手入をしておられるカラーの写真はとても嬉しく拝見しました。お宅は定めしお美しいことと存じます。あなたがお孫さんの啓子ちゃんを可愛がられるわけがよく判りました。啓子ちゃんはとても可愛らしいお嬢ちゃんです。もし啓子ちゃんが私の孫であったとしたら、私だって恐らく私のペットとして可愛がることでしょう。私達は孫の男の子をとても可愛がっております。いま一歳です。歯が二本生えていますが、まだ歩くことはできません。床の上をすばしこく這いまわっております。丁度小さな動物のようです。多分もう少しすれば私達にも孫の女の子が授かりましょう。

私はあなたのお手紙の中にあった三笠艦上での霊砂の引渡し式のニュースを承って驚きました。私はあのことがそんなに重要な事柄であろうとは考へつきませんでした。砂の量の少なかったことは本当に申し訳ありませんでした。特にルオットの砂の少なかったことはすみません。もし私がそれほど重要な事柄であることを知っていましたら、もっと沢山の砂を差上げられるよう用意したのでしたのに。それが間違いなくクェゼリン・ルオット・ウォッゼの砂であればよいと考えてお送りしました。多分艦長はあのような儀式にふさわしいようにあの箱の体裁をととのえて下さったことと思います。

あなた御自身のこと又御家族のことお知らせ下されありがとうございました。多分私はあなたのお嬢さんの美代子さんのピアノは、聞いたことがあると思います。というのは私はラジオトウキョーの短波放送をよく聞いています。ここでは日本のラジオはとても大きくそしてはっきりと聞えます。私はよくその音楽とニュースとを聞いています。日本のアナウンサーをきいて私は日本の言葉の発音を勉強しております。

紀代子さんが小児痲痺にかかられたお話をうかがってお気の毒に思います。しかし熱心なクリスチャンでいらっしゃるとのことそれならば定めしお嬢さんはお幸せと思います。私の家内と私がアングロカソリックの信者であり、又私達の息子がエピスコパル（アングロカソリック）教会の宣教師でありますことを御承知下さったら、お嬢さんにもお喜びいただけるのではないかと思います。

あなたが大正十一年海軍兵学校を御卒業のとき、私はまだ十歳の少年にしかすぎませんでした。土屋さんは私より一つか二つお若いと思います。

「金剛」と「榛名」（註同型の巡洋戦艦）は太平洋戦争中こちらではとても評判の軍艦でした。私達は戦争中の金剛についてよく知っておりますだけにその砲術長であったあなたと知人になれたことを誇に思います。そしてまた私は昭和十七年十月十四日夜〔の出来事（あなたがガダルカナル島のヘンダーソン飛行場を砲撃なさったときの）をよく記憶しています。飛行場は完全に壊滅され、飛行可能の状態に残されたのはSBD降下爆撃機一機だけであったことも事実であります。あなたからお聞きするまで死傷が何人であったか忘れていました。私はSBD機のことはよく覚えています。何故なら私は日本軍に向ってよくSBD降下爆撃のため飛びましたから。

マクミラン栄子さんの助力によってあなたの手紙中最後の一節を了解することができました。そして私もあなたの御意見に全く同感であります。私達は本当にお互い何の憎しみもありませんでした。それなのにお互い死を賭して戦ったことを遺憾に思います。しかしあなたも私もまた外のすべて軍服に身を固めたものはそんな選り好みは許されませんでした。その恐怖のときから二十年の歳月の流れた今日、日本とアメリカとが親友になったということはとても嬉しいことです。いつまでもよい友達でありたいと思います。私は戦争というものがなくなることを願っております。ベトナムにおける戦いが平和におさまることは私の強い念願なのです。

昭和十七年十月ガダルカナルで戦死した四十一人のアメリカ軍人の遺族の氏名と住所はあなたのため入手することに努力します。ワシントン国防省の担当局に照会しなければならないので、時日を要します。出来るだけ早く氏名、住所をお知らせしますが、時機ははっきりお約束できません。林大さんがクェゼリン本島で亡くなったか、或は環礁中のエビゼ又はルオットで戦死されたか御存じでしょうか。御戦死の日を正確に知ることは無理でしょうが、一月三十一日から二月六日までの間であったことはたしかと思います。何れにせよ島を守備するため勇敢に戦はれたことは間違いないとお信じになってよろしいと思います。私の知っている範囲ではクェゼリンで米軍の捕虜となった日本軍人は一人も居りません。ただ一人重傷危篤によって自害する力も失った人が米軍に捕はれたとききました。

長い夏のあとやっとこの二、三日涼しく、その冷い空気を吸うことが私達を元気づけてくれます。あなた方がよい秋をお迎えになるようお祈りします。

十月九日の儀式の写真や新聞記事を御恵贈下さるようお待します。クェゼリン行の請願の許可のおりないこと土屋さんから聞きました。実は当オックスナードからサイパンの高等弁務官事務局の職員として一名行っております。あなた方の御希望が何であるかよく説明してもらいます。恐らくあた方のため一肌ぬいでくれるでしょう。私からクェゼリン司令官あて送った手紙の回答は受けておりませんが、繰り返し書簡を送って置きます。私の敬愛する、貴下の夫人 HANAYOSAN そして御家族御一同様　（浮田常任幹事訳）

＝遺　作＝

「随分大きな島」（2）

―兵曹長衛藤二六殿日記―

九月二十四日（昭和十六年）

正午頃からトラック島の無数の島々が遙か前方に姿を現はしだした。随分早く入港したのだが、便船が来なかったので暗くなるまで艦上でポッカリ待たされた。この島も豊富な椰子やその他の樹木に恵まれてとても新鮮な感じがする。七時頃防備隊のダイハツに迎えられて生れてはじめて洋上に浮ぶトラック島の埠頭に第一歩を印した。第一印象はまづ良好だ。それに島民が想像以上に文明化されていて男も女も「コンバンわ」とやさしく言葉をかけてゆく。何ともいえないなつかしみが胸にこみ上げて来て云いしれぬ嬉しさに一杯になった。

一行二十五名ここでしばらく便船を待つこととなり、その第一夜をここの宿舎ですごすこととなった。寝すごしたかと急いで起きてみるとまだ四時半だった。夕方は六時になると暗くなるかわりに朝は馬鹿に早く夜が明ける。

九月二十五日

涼しい風が絶え間なく吹いている。誠に住みよい所だ。島は男女とも赤い着物を好むとみえてみんな色ものを身につけている。大人は従順で、子供はとても純朴だ。首をかしげてにっこりされるとついつりこまれてしまう。

九月二十七日

午前中は作業。午後一時から十時までの外出が許可された。はじめての外出だ。友人を誘って町を限なく歩き廻ってみた。大きさは小さな田舎町程しかないがそれでいて不思議に洋々たる止めどもない風情がみなぎっているように感じた。またこれに反しまだまだ大古そのままのような風習も残っているように思へた。一日も早く文化の浪が本島の旧習を洗い流してくれればよいが。浜辺に又丘に涼し気な椰子の勇姿が現世をかけ離れた美しい夢の様な感じを漂はせている。別に変った感じを受けるものはないが椰子の木ばかりはエキゾチックな感じを味あはせてくれる。

スコールの上ったあとの椰子、月に照された椰子の姿は充分に一目千両の価がある。一日の労働を終えて浜辺に憩う島民等は幾度かこの椰子に慰められ、この椰子に誇りを感じたことだろう。この風景に充分の文化の浪が乗り切ったときこそ夢の国が設立するのだろう。帰り途スコールに見舞われずぶぬれになる。八時頃帰りついてみるとみんなぐっすり寝入っていた。

九月二十九日

午前も午後も山頂え石の運搬作業をする。荒い仕事をする関係か無性に腹が減る。食後一時間も経たない中にもう腹ペコペコだ。体の調子もいいし、この分だと一年位の熱帯地勤務なら先づ大丈夫に御奉公できるだろう。午後椰子の実を割って水をのんでみたが、とてもおいしかった。島民のよく肥っているのもこうした食物によるものだろう。

十月二日

午前は基地から道場への移転作業。午後は雨の中を砂運び。幾分ぬれたが大したことなし。

明日飛行機便があるので兄と妹に手紙を書いた。菓子や書物の御願いだ。夜居住区で映画があった。

「日本人」と「泣虫小僧」

十月四日

いつになったら任地へ向へるんだろう。流浪に似た生活が嫌になってしまう。

十月六日

午後三時「イナリ丸」でトラックを後にしポナペに向うこととなった。此の日を我々一同どんなにか待ってゐた事だろう。貨物船なので部屋がないというので船倉の上に仮天幕をはってそこに居住することになった。

六日も七日も左程船はカブらなかった。

註　トラックからポナペまで約四〇〇浬、ポナペからクエゼリンまであと五〇〇浬

会計中間報告

常任幹事　佐藤宗丕

昭和四十年十月三十一日現在の会計状況を、試算表によって報告いたします。

本年度は、二月六日の総会の議決によって年度会費は頂かぬこととし、志ある会員からの自発的な御寄附によって、運営することとなりました。

寄附は当然任意のものでありますので、総額の予測はできませんが、十月末現在で既に七十万円の多額に達しました。

この中には会員中の大口や、匿名様又ウォッゼ島からの帰還者の御寄附もありますが、やはり何といっても数多くの会員のお志が積り積ってこの額になったものであります。

支出の面では、別項記載の通り今年最大の臨時行事であった霊砂引渡式関係費用は、防衛庁、厚生省、記念艦三笠その他関係者の格別の御協力によって、行事の盛大であった割合には、少くてすみました。

刊行費と通信費は、環礁の一号と二号の分で、本紙（三号）の分は含んでおりません。

本会の資産は、申すまでもなく全会員の浄財であり、会員の御希望による将来の活動に備えなければなりませんので、心して保管しております。監事及び役員には、役員会の都度現況を詳細報告しております。

（自40. 1. 1 至40. 10. 31）会計現況報告

（40. 10. 31現在試算表）

39年度よりの繰越		560,869
寄附金その他の収入		701,917
預金利息		14,975
（収入計）		(1,277,761)
現金	6,541	
振替貯金	36,734	
当座預金	203	
普通預金	97,128	
定期預金	570,000	
（現金預金計）	(710,606)	
2月6日慰霊祭費	62,765	
霊砂引渡式関係費	51,915	
会議費	9,300	
事務用品費	12,080	
印刷費	25,205	
刊行費	269,630	
通信費	122,825	
事務費	7,790	
振替払込料	2,405	
雑費	3,240	
（支出計）	(567,155)	
合計	1,277,761	1,277,761

寄附者芳名

（一四六名）

引続き左のとおり多数会員から寄附・拠金を頂きましたことを御報告いたします。会員のみの力によって肉親の英霊を心からお慰めするという当初からの願いを果し得ますのも総て皆様のお力添によるものと深く感謝致します。役員一同一層努力し有意義に使用致します。

寄附額　芳名（敬称略）　（パーレン数字は寄附回数）

◇北海道
一〇〇〇　妹　大橋　すみ
〃　兄　友高　利市

◇青森県
一五〇〇　妻　船橋　カヤ
五〇〇　母　鳥矢部さき

◇岩手県
一〇〇〇　妻佐々木みよし
〃　妻　吉田　ミヨ

◇山形県
一〇〇〇　母　斉藤むらよ

◇福島県
三〇〇〇　母　皆川　タツ
二〇〇〇　兄　三浦　一郎
一〇〇〇　母　青木　チエ

◇宮城県
一〇〇〇　父　小野寺定右ヱ門
〃　父　鈴木長太郎
〃　父　高橋虎三郎
〃　長男　千葉　幸
五〇〇　弟　鈴木　隆二
〃　妹　鈴木ゆき子

◇茨城県
二〇〇〇　妻　榎本　トミ
一〇〇〇　妻　若狭あさ子(2)
五〇〇　父　野口　孝雄

◇栃木県
一〇〇〇　兄　田名網武夫
訂正・前号寄附者芳名中東光光一は東泉光一の誤

◇群馬県
一〇〇〇　妻　泉谷　スミ
訂正・前号寄附者芳名中笠田善四郎は笠原善四郎の誤

◇埼玉県
三三〇〇　弟　山藤　茂
一〇〇〇　妻　浅野　チカ
〃　父　小林　喜助(2)
〃　妻　志村　マツ(3)
〃　妻　藤田きよせ(3)
一〇〇　小谷中せい

◇千葉県
二〇〇〇　父　石川　惣蔵
一〇〇〇　父　秋山善五郎
〃　母　中村さつ子
五〇〇　妻　鈴木　タケ

◇東京都
一〇〇〇　妻　中村喜久代
五〇〇　兄　昼間　繁文
三〇〇　妻　佐竹　エス
〃　弟　島田　章一(2)
〃　母　三ツ木たね(2)
二〇〇　妻　木村　久子(2)
〃　母　小泉　タケ(2)
〃　妻　三角トキエ
〃　姉　緑川　マキ
〃　父　森下　周作
一五〇〇　二女　横浜　福居
一〇〇〇　妹　宇田川ひさ(2)
〃　父　小畑　正一
〃　妻　川井マツノ
〃　母　川本　十松
〃　母　木間　マツ
〃　妻　国松ふみ江(4)
〃　母　栗城　ふじ
〃　父　古賀織之助(2)
〃　弟　末広　正男
〃　母　中田　スズ
〃　兄　並木　多重
〃　妻　芳賀タツエ
〃　弟　原田　得恵
〃　母　福原　キチ(2)
〃　母　増山　キミ
〃　母　水上　文子
〃　妹　和田　正江
〃　母　石谷　トシ
七〇〇　匿名様
五〇〇

◇神奈川県
三〇〇　母　今村　シゲ
〃　父　江馬　敏寿(3)
〃　大快　良明
〃　姉　及川　ユキ(2)
〃　浜田つき子
〃　兄　松井　直一
〃　母　山中　シヅ(2)
〃　父　吉田　一郎
三〇〇　妹　小山キミ子(2)
二〇〇　父　山田　政雄
一〇〇　妻　近藤　イト
三〇〇　妹　匿名様
二〇〇　妻　佐藤　貞子(2)
〃　父　関根八十八(2)
一五〇〇　妻　高木マズエ(2)
一〇〇〇　妹　新井　澄子
〃　妹　飯島千代子
〃　妹　石原さと子
〃　妻　大石　豊子
〃　姉　沖立　キヨ
〃　母　北川　イマ
〃　母　斉藤　リウ
〃　妻　高橋　サダ
〃　母　遠山　チヨ
〃　兄　中村　忠治
〃　妻　福島　レイ
〃　母　福本　ミネ
五〇〇　妻　伊沢　ヤス
〃　父　鈴木　昇(2)
〃　父　塚越　義隆

◇新潟県
一〇〇〇　妻　小川すみ江
五〇〇　兄　大山　一郎
〃　父　岡崎清太郎
〃　父　保科　寅松

◇富山県
一〇〇〇　母　寺島　きよ(2)
五〇〇　三男　加賀　典昭
〃　弟　田添　一成(2)
訂正・前号寄附者芳名中平井為造の誤は平井為造の誤

◇石川県
一〇〇〇　妻　松岡　かつ
五〇〇　母　唐津　キク

◇福井県
一三〇〇　妻　梅田　清子

◇山梨県
二〇〇　母　三井みほ子(2)
〃　父　八巻　忠智

◇長野県
一〇〇〇　妻　青柳さかえ
五〇〇　父　山崎　義美

◇岐阜県
五〇〇　妻　田中みよ子

◇静岡県
一〇〇〇　妻　飯田たつ子
〃　妻　大塚　かね
〃　妻　中村　ひさ
〃　母　堀江　ふさ
二〇〇　父　木野　清吉
〃　中野　兼吉

◇愛知県
五〇〇〇　妻　樺山コウ子(2)
一〇〇〇　兄　川村　正一

◇三重県
一〇〇〇　妻　峪口まつの
〃　妻　芝原　国子
五〇〇　兄　東　利市

◇京都府
訂正・前号寄附者芳名中梅田助市は柴田助市の誤

◇兵庫県
二一五〇　父　藤本　亀吉
五〇〇　母　松原　とり(2)

◇岡山県
一〇〇〇　妻　池元　こめ
〃　母　森尾起志江

◇広島県
五〇〇　妹　橋本　良子
一〇〇　妻　多葉井八重子

◇徳島県
一〇〇〇　父　豊田　民蔵

◇愛媛県
三〇〇〇　父　長岡　楽三(2)
六〇〇　母　久保　スミ
五〇〇　妻　岡村　栄子

◇福岡県
三〇〇〇　父　遠藤　甚二
二〇〇　父　進谷　実

◇長崎県
五〇〇　妻　広瀬カツヨ

◇佐賀県
五〇〇　妻　山田　文子
二〇〇　父　野上　連乗

◇熊本県
二〇〇　妻　勝木ユリエ

◇大分県
二〇〇　父　内田政次郎
〃　父　深田　秀人

◇宮崎県
二〇〇　妻　森　フサエ
一〇〇　河村美津子
〃　母　杉田ヨシノ(2)

◇鹿児島県

三〇〇〇　母　上村トヨツル
一〇〇〇　母　曽山　スガ
五〇〇　妻　道場　トメ

◇沖縄県

一〇〇〇〇　妻　石原　キク
一八〇五　妻　野原カマド
一〇八三　長男　金城　要吉
七二二　長男　知念　幸栄
〃　妻　仲座　カナ

事務局だより

○海上自衛隊への感謝

一、霊砂を護送の艦が**あまつかぜ**になるか練習艦隊になるかが決まる前、本会からは双方に予め趣旨を説明して願出をした。双方とも日本を出てから航空便での依頼なので説明の不足もあったが練習艦隊ではブラジルの「レシフェ」港在泊中霊砂引渡し式の予行を行われたそうである。伍賀守雄司令官がその乗艦**あきづき**に下令して、霊砂護送の任が練習艦隊に指定された場合万遺憾なきを期したのだと沖為雄副官から洩れ聞いたが、戦歿者に対し敬虔なお取扱いには頭の下る思いであった。

二、海軍では半舷上陸といって土曜、日曜は半数の乗員に上陸（外出）が許される。十月九日は丁度土曜であり、気候もよいので誰もが久しぶりの上陸をたのしみたかったわけである。が、マーシャル諸島でなくなった先輩英霊のことを考えたら半舷上陸を返上するなど何のことなしと上陸をやめて御協力して下さったそうである。英霊もまた我々遺族もともにその御芳志に深く感激した。

○戦歿者等の遺族に対する特別弔慰金支給法

こういう法律が本年六月一日に法律第一〇〇号をもって発布されております。

法文だけ見てもちょっと解りにくいのですが、例えば

一、戦死者の兄弟であって、以前弔慰金は受けた。しかしその後何もうけていない。現在戦死者のお祭りはしているが、国からの手当はうけていない。

二、戦死者の父母も妻も亡くなってその一人っ子である者が、二十二歳であるため遺族年金も公務扶助料もうけていない。戦死した父のお祭りはしているが国からの手当は何もない。

というような人に三万円の特別弔慰金が交付されるという法律です。この説明が簡単すぎて不充分の点もありますが、自分はこれにあたるのではないかとお考えの方は本部に御申出下されば調べてさしあげます。御遠慮なくお申出下さい。

○ブラウン島戦歿者遺族の方へ

ブラウン島については霊砂も墓地の写真もないことを申わけなく存じます。10頁本会当面の企画で記載しましたように交渉しています。帰還しましたらお知らせします。本部に霊砂が来たら送れということを予め御申出おき下さい。同封のハガキでお願いします。

○鎌倉竜宝寺に霊砂

本年十月十日鎌倉市植木一二八竜宝寺住職団野弘之殿から、厚生省の業務第二課長村岡達志殿あて左の書簡が届きましたので、クェゼリン、ルオット・ウォッゼの砂を少量づつお送りしました。湘南方面にお出掛けの折は竜宝寺にもその霊がまつられていることを想い出して頂きたいと存じます。

『秋色日一日と濃くなって参りました。先般濠州カウラの霊石を分与して頂きましたときは大変お世話様になりました。実は本日新聞紙上にて、太平洋戦争中日本軍将兵が玉砕いたしましたマーシャル諸島のクェゼリン島・ルオット島・ウオッゼ島の「日本人墓地の砂」が厚生省に渡された旨の記事を拝見いたしました。恐れ入りますが、又分与していただきたくお願いいたします。』

○住所異動の御通知を戴きたい

御住所の異動は会の方へ御通知下さいますようお願いいします。

旧住所で発送いたしますため切角お送りしても返戻になる例が度々あります。前々申上げますように本部では一柱一枚づつ十三糎に十八糎半のカードを整備しあり御住所変更、戸籍異動事項、寄附受付など記入しております。最近では霊砂引渡式への御案内が返戻となり後で惜しかったと仰言った方があります。

○在庫品について

左記の品は本部に在庫があります。御所望の方は括弧内の料金を添え御申込み下さい。

一、二十年祭のスナップ写真（一組送料共百五十円）

二、戦記「クェゼリン島の今と昔」（一冊送料共百円）

三、環礁一、二、三号（何れも送料共一部五十円）

四、通常払込料金加入者負担の振替貯金用紙

五、クェゼリン島、ルオット島の墓地全景の写真

キャビネ版送料共一枚五〇円

サービス版送料共一枚二〇円

○二月六日の出欠を、一ヵ月も前に決めるのは御無理かと思いますが、最新にして正確な名簿を二月六日に間に合はせる為、同封**はがき**は必ず**一月一日迄**にポストにお入れ下さい。

切手を貼る必要はありません。

編集を終えて

本会が呱々の声をあげてから二年半、文通下さる方は二千余人、本会に届いたお便りは既に五千通を超え〃環礁〃は三号を迎えました。ここまで育ちましたのは一にも、二にも会員・篤志会員皆様の心からの御激励と御指導によるものでありまして、役員会の度毎に、どうしたらお報いできるのか反省を繰りかえしている次第でございます。

今年もさまざまの想い出を残し暮れようとしております。皆様お揃い良いお年をお迎えになりますようお祈りいたします早いもので来年二月は二十三回忌。靖国の本殿で皆様と御一緒に御冥福をお祈りし、一日も早くとこしへに眠られる南溟の果に碑を建て、お慰めにゆくことのできますよう英霊の御加護をお願いいたしたいと思います。**二月六日には**お誘い合せ多くの方の御参会をお待ちいたします。

本会役員及び篤志会員名簿

名誉会長　朝香　鳩彦
顧　問　石橋　湛山
相談役　朝香　孚彦
会　長　林　茂清
副会長　加藤普佐次郎
副会長　古賀繊之助
常任幹事　浮田　信家
常任幹事　佐藤　宗丕
幹事　萩原金次郎
幹事　井上　賀雄
幹事　高橋　鎮夫
幹事　市川奈美子
幹事　木村　久子
幹事　小泉　文江
監事　岡野　正文
監事　橋口　昭利
篤志会員　有馬　成甫
篤志会員　板垣　徹
篤志会員　大野　克一
篤志会員　瀬沼　光久
篤志会員　土屋　太郎
篤志会員　中島　昌彦
篤志会員　中田　虎一
篤志会員　成田喜代治
篤志会員　長谷川栄次
篤志会員　長谷川　敏
篤志会員　林　幸市
篤志会員　松平　永芳
篤志会員　村岡　達志
篤志会員　安藤　小夜
篤志会員　本木　光江